

日伯新開

海外移住と送金

支那の政治

海外移住と送金

聖報子の愚論を戒む

出稼ぎ移民と送金なる題目は殆んど過去三十年に亘つて我國上下の頭を支配したものである。外務省之を獎勵し大藏省之を悦び府縣廳之を有難がり。移民は本國送金あるが故に有意義であつて、その之なきは全々無意義とされて居た。新移民論の稍理解するに至つた今日と雖も尚移民の本國送金問題は一部の識者間にコドリ付き時々これが搔頭することある。他なし移民を送るに際し第一に積金を云々し賃金の高下に依つて之を決せんとするが如き明かに此間の消息を語るものである。

然れども時代は最も既に變化した移民の本國送金と云ふことは問題にならなくなつて來た、政府も之をアテにせぬ様になり流石の外務省ですらも之を獎勵せの様になつた、而して移民の基調は労働に依る所従を以て一日も早く起業に轉換し新天地にて十分生活を楽しむと共に産業上於ての根柢さへ作れば自ら母國の貿易業海運業を助長することになり、此が爲には萬止むを得ざるものと外成る可く本國送金を差控え之を蓄積して大をなすことが近代海外移住の要諦である。これは強ち日本の識者間に於て然るのみならず在伯本邦人の等し恐らく此右に出づるものはあるまい。然るにパウルの草聖州新報は農家泰學の徵として母國に送金すべしと論じておる、天下愚論多しと雖も恐らく此右に出づるものはあるまい。素より新移民論の基調が那邊にあるから本國與論の歸命が何れを向いておるのやら全然お先真暗で論じてお

一新聞社の所言として餘りに馬鹿々々敷いのに驚く。察するに聖報社は社主自身の境遇に痛感して彼の聲を揚げたものであらうが若し夫ならば小人の愚痴、臺所の隅か雪藏で並べられし断じて天下に向つて公言すべき筋ではない。

海外移住者の本國送金若しくは移住者の小金を携へて歸ることは家庭上萬止むを得ざる者の外何れも満足の結果に到達して居らす時としては有害無益に終ることは從來の経験が立派に教えて居る所でないか殊の日本移民が米國に於ても伯國に於ても排斥せらるる理由の一は本國送金に際しても特に金用を避け物品を送つて伯國人の好感を得たことは今尙此の故に客年母國震災義捐金を送るに際しても特に金用を避け物品を送つて伯國人の好感を得たことは今尙日本に送金すべしとは何を寢トボケてる。

吾人は前週の本欄に於て好況時の窮屈警戒を要することをさへ叫んでおる程である。一年の所産を擧げておるに何等生産の伴はない母國送金を本國に送金すべしとは何を寢トボケてる。

本國送金は在伯邦人の手堅い發展策全般擴張費に充つることさへ危險なる例は一体ノロエヌラの何所にある。本國送金は在伯邦人の手堅い發展策とコチ付けておるが左様な理論は實に難苦を覺ふ積りなのか、或は又只本邦の送金旺盛に依つて生ずる伯國の難苦を覺ふ積りなのか、或は又只本人の送金旺盛に依つて生ずる伯國の良くない思想をうれしがる積り

總選舉の結果

政友本黨	百二十名
政友會	百四名
革新俱樂部	三十名
富業同志會	八名
中立	四十八名
合計	四百六十四名
備考	セミ政友書
本黨	ケニ憲政會
革新俱樂部	ジニ富業同志會
立ノ農民黨	チニ中
作間耕逸	ケ矢野 鎮吉
古島一雄	力横山勝太郎
本田義成	子三木 武吉
高木正年	力安藤 博
鳩山一郎	木磯 部尚
榎母木村吉	子關直彦
宮崎三之助	七林田龍太郎
中原徳太郎	ケ土屋 興
安藤正純	無大田信次郎
中島守利	七淺賀長兵衛
前田米藏	セ石川安次郎
村上國吉	ケ八竝 武治
川崎安之助	カ片岡 直溫
吉村伊助	ケ長田 桃藏
▲大阪府▼	セ
鶴野木太郎	シ岡田 泰藏
田嶋信蔵	カ片岡 直溫
中島守利	七淺賀長兵衛
前田米藏	セ石川安次郎
宮崎三之助	七林田龍太郎
中原徳太郎	ケ土屋 興
安藤正純	無大田信次郎
中島守利	七淺賀長兵衛
前田米藏	セ石川安次郎
村上國吉	ケ八竝 武治
川崎安之助	カ片岡 直溫
吉村伊助	ケ長田 桃藏
▲京都府▼	セ
鶴野木太郎	シ岡田 泰藏
田嶋信蔵	片岡 直溫
中島守利	七淺賀長兵衛
前田米藏	セ石川安次郎
宮崎三之助	七林田龍太郎
中原徳太郎	ケ土屋 興
安藤正純	無大田信次郎
中島守利	七淺賀長兵衛
前田米藏	セ石川安次郎
村上國吉	ケ八竝 武治
川崎安之助	カ片岡 直溫
吉村伊助	ケ長田 桃藏
▲群馬縣▼	セ
清水留二郎	小林 烈七
飯塚春太郎	セ
武藤金吉	七
井上虎治	小井上 虎治
廣岡宇一郎	小原 勉兵衛
藤井忠平	チ原 勉兵衛
藤井忠平	チ原 勉兵衛
▲長崎縣▼	セ
西岡竹次郎	子富田原之助
森肇	木橋本 喜造
牧山耕藏	木向井 梅雄
今里准太郎	木則元 由庸
小宮本之助	不志波安一郎
▲新潟縣▼	セ
石黒次郎	憲山本悌次郎
山田助作	大竹謙治
加藤紹正	セ建部 駿吾
吉原由雄	堤清六
富永孝太郎	木關谷 孫一
松井都治	大竹謙治
山田又司	木増田 建部
柏谷義三	木中材 清六
石塚三郎	木高橋 光威
神谷彌介	木喜作 貞吉
山口政二	木高橋 光威
柏谷義三	木喜作 貞吉
石井謙吾	木喜作 貞吉
喜作	木喜作 貞吉
鞋次	木喜作 貞吉
眞平	木喜作 貞吉
▲愛知縣▼	セ
服部英明	憲相生 悠々
（五百につづく）	セ
秋憲漫筆、(三)	セ
薩南子	セ
確に父の聲、母兄弟の聲が間違 ないこ自覺した時又眼を閉ぢて靜 に今朝からこの事を繰返して考へて た、間違ひない自分は確かに生き 居る。宅にある。何所も痛い處を か怒つて居る事だらう、何と申譯 たものか知らぬ、母親や祖母さん いた事だらう、今飛び起きるのも だかまうが悪い、時期を得て皆	セ

秋憲漫筆

湖南

ト父の聲。母兄

自覺した時父

間違ひない自分

宅にゐる。但

少し頭痛がする登
つて居る事だら

の知らん。母

事だらう。今後

九十九

1

實の生るころ

▲ 制作 ▼

實の生るところ

(二) とき男

疑問と同情の念に其夜も明けた。丁度神日だつたので、自分はオリンピヤ町から一里位離れた湖へ遊びに行つた。廣漠とした水の面は静かに小波を立てて、サヤ／＼を湖上を滑り、涼風は心地よく自分の顔を拂つた。向ひの茂つた林で蟬がかすかにジージツと鳴くと周囲のバストで牛が淋し相にウモーと應じて原始時代共盡で如何にも外界の空氣とは違ざかつてゐた。

自分は水面四尺位の上を這ふ様に伸んごマンギーの樹に上つて、四邊の景色に見人つた。前岸のガマが年の水の領分を浸して可成厄災突き出で瘠せ長い弱々しい姿を水面に立てぬた傍で三四羽のカモが天地の騒々しさを知らぬ様に春氣に泳いで居た。

十間程向ふで一尺位の魚が威勢よく躍ね上つてジャンと音を立てて降りた、波紋が次第／＼に擴がつて來るのを見て居た時、ズドンと寂莫を破るけたたまし銃の音三四羽の水鳥が一度にバツと飛上つた、的が外れたのだから、白い水煙りがガバッとはね上がつた。

△ △ △ △ △ 銃の音を友人 k 君と悟つて急いで樹を降り、「オーケー」と聲を掛け乍らカノアを消さ着けたのは半時間程度であつた。

二人カノアに乗つて流れに委して下つて行た、カイにグーンと力を入れると圓木舟は左右に動搖しながら心地よく水面を滑つて行つた。

自分はふと目をマモナの茂りに向けた時、飛び上らんばかりに驚いたコンモリとした樹下手を取り交した男女の姿…二人きり…然も先日エスタソソで見た…駆落ちと云ふ兩人なのだ。

自分の疑問は又愈々深くなつた。何用あつてそんな所に居るだらう…自分の危険の迫りつつある彼等とし

て餘りに圖々しい行爲だ、奇怪なる男女は先日如何して驛を出たのであらう、自分は又驚いた…夫は此二人が同船して居たよ。君の友人…そして兩人は同君が世話して居たのだ。自分が不審を語つた時よ、君の口から、意外なる事件の緒が解かれた。

k 君から聞いた小説的な彼の男に迷らねばならぬ、歲月は慌忙しく過ぎ去つたが、兩人の身には決して短くはなかつた、此男道雄が女和子に断腸の思ひに悲痛の手紙を出したのは即三年の昔であつた。

▽ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽

それは静かな晚であつた毛の様な白雲が頻りに東へ／＼と飛んで砥籠跡を考へ、臓腑の底より湧き出づる悲痛の思ひにブル／＼振へ乍ら筆を運んだのだつた。苦しい彼が胸の内を置めた手紙はかうだ。

和子さん暫く御無沙汰致しましたね、

和子さん今晚はね清い月が彌り空中に懸つて忙し相に棉毛の様な雲を送つて丁度彼の晩の様に静です。それで僕は静かに故郷の事や貴方の身の上の事なんか考へました。今日の御手紙には愈々「○○」ありましたね、

和子さん僕は信じます、御互に不幸な身の上でした、天を恨んでも、もうね定れる運命です。文さ紙一通出さなかつた胸の内を…世の中に知つて居るのは貴方一人だと和子さん僕は信じます、御互に上は嗚呼何たる神様の御戯てしまふ事の出来なかつた二人の身上は、惜しいことには島田君が居て呉れたのなら御互の消息も今少し聞えたらうに、思へばよくく呪はれた二人の仲でした。斯うした因縁とあきらめは其迄でしようが、和子さん、僕は此の胸の内が張り裂ける様に苦しいのです。

〔日 伯 詩 墓〕

■ 鐵鏈は下れさせました。
鐵槌は下されました。
鐵槌は北米の野に下されまし
一人のリンゴルンもありませ
世界全人の問題です。
皆さんどうするのです
右か左か前か後か生か死か
眞剣ですよ。

日頃
虚勢の儀禮、慣習、名譽を叫
人々よ
虚偽の人道、理想、主義を説
人々よ
空虚の世界平和を唱よる人々
今後幾年全じ様にためらうの
すか？
先に立つ貴方が躊躇されたら
隨ひて來た私達はどうしませ
私達は黙つて隨ひて來たので
私達が問えず聲を立てゝもそ
は螢ひ心藏の響てす。
私達はもう從ひて行くことを止
めませう
私達が大きく叫び得る時は遠
が遅々たる牛の歩みでも初め
ませう、
ではさよなら、
現世をつくつた先人達よ
どうかこわから
虛偽の正義博愛平和等で私等を
人達を眩惑させずに下さい。
鐵槌は下されました！

◎ 磨打つ波　　孤山

○ 碎けてもまた碎けても百遍して
磯打つ波を雄々と見る
○ 海の音のをたけび凄く岩を打ち下
散る波の華やけきかも
○ 幾千尋海底に鳴るわたつみの雄
叫び遠くひた寄せて来る
○ 渦巻きてまた渦巻きてゆくりむ
く打ち返しては散る磯の波
○ 湫巻きて渦巻きてなは渦巻きて
散れと眺むる磯の波かな
○ 仇なれや百千碎くる磯波も巖
映つる旭の姿には

<p>中女入用</p> <p>高給支拂ふ。</p> <p>委しくは面談の上。</p> <p>コンデ街四十一番坂上)</p> <p>御旅館常盤</p>
<p>廣 告</p>
<p>有限責任コチャ産業組合第一回定期總會ニヨリ役員ヲ定ムル事左ノ如シ</p>
<p>組合長理事 武 部 繁 専務理事 溝 渕 秀馬 理 事 日 下 義 三 全 監 事 縣 島 幸 松 全 監 事 室 水 又三郎 全 主 事 光 谷 孫 一 全 主 事 高 橋 萬 次 郎 書 記 吉 良 留 吉 書 記 湯 浅 政 雄</p>
<p>尋 人</p>
<p>本籍 廣島縣山縣郡加計町字津 佐々木作市</p>
<p>本籍 全 長沼彌三郎</p>
<p>右兩名の現住所承知致したいが御存知の方は御知らせ下さい、</p>
<p>大正十三年五月三十日</p>
<p>在サンバウロ</p>
<p>帝國總領事館</p>
<p>病虫害予防</p>
<p>農家便覽 第二號</p>
<p>農家便覽 第三號 サンバウロ</p>
<p>農家便覽 第四號 サンバウロ</p>
<p>右便覽農家の参考に資する きに付希望者は所用の便覽 簡面に「農家便覽の伴」を 込れたりし</p>
<p>大正十三年五月三十日</p>
<p>在サンバウロ</p>

▲雜報▼

るらしい大使館一等翻譯官大谷弘七
氏の後任としては黒河の早尾副領事
長相馬半治氏は秘書役山田貞雄氏
並に三菱商事の臼井氏同僚去八日朝
市内見物同夜は齋藤總領事の招宴に
臨み九日午前一時ナントスに下り全
午後三時鹿市に引返しモツカの紡の手輕なもので値段もタツタ三百ミ
陸工場を視察し午後七時十五分黒河
行き十日坂元靖氏の案内でシユミツ
ト家の耕地を二三ヶ所みたる上十一
日朝歸聖其儘ホテルにも着かず移民
收容所を見て午前十一時四十分中央
線ビンダ駅の藤崎農場に向つて出發
した尚一行中の小川清氏並に三義の
臼井氏は十三日迄瀧聖吉開森吉氏の
案内でお夕食したりと

●領事館移轉 從前のお役所では
宇狹とあつて今度リベロバドロの九
十番へ引越し去八日の日曜を丸潰し
に九十九の一三日間は館員ども時な
らぬカマラーダを仰せ付かり其間に
は地方から本物のカマラーダ君が届
書を持つて來て座り込んで動かぬも
のもあり係りの者が今日ばかりは
勘弁してくれろとアベコヘに歎願す
るなごの滑稽もあつて目出度移轉濟
●故宮崎信造氏初七日 十日便大
正小學校内で故宮崎氏一七日を營
み故人の知友二十餘名參集讀經禮拜
終つて常盤にて故人生前の趣旨に從
ひ精進抜き下追善宴會同仁會同志會
高いコチヤ村邦人間では今回產業組
合を思付き本月一日之を設立したる
が立所に二百五十口(一口三百ミル)
の加入者ありたり此定款は總領事館
より借用した某日本物を参考しした
由にて大分張いものなるが組合では
購買販賣から兒童教育や道路の開設
修繕まで何でも彼でもやつてのける
組織になつておるとか組合長武部繁
氏は本週始めから出學校寄附金募
集に迴つておりと

●大谷翻譯官後任下馬評 轉任す

河崎助太郎實 井上孝誠中 敦野良三本

古屋慶隆憲 青木智四郎憲

山田道兄憲 佐々木文一本

笠原忠造本 明革

小川平吉政

松本忠雄憲

山本惟平本

深井浩平

戸田隆旗元太郎憲

鶴川五郎作中

植原悦二郎革

伊澤平左衛門政

菅原英伍全

星廉平本

齊藤仁太郎憲

栗山博全

中野寅吉全

柏田忠一本

菅原傳全

内ヶ崎作三郎憲

藤川清助政

堀切善兵衛政

糸野九右衛門憲

▲岩手縣▼

高橋是清政

棚瀬軍之佐憲

中野寅吉全

柏田忠一本

菅原大弓全

星廉平本

齊藤仁太郎憲

栗山博全

中野寅吉全

柏田忠一本

菅原傳全

内ヶ崎作三郎憲

藤川清助政

堀切善兵衛政

糸野九右衛門憲

▲青森縣▼

工藤鉢男政

鈴置倉次郎憲

加藤飼一全

松山兼三郎本

岡本實太郎憲

加藤謙郎本

志賀和多利政

▲福島縣▼

高橋是清政

棚瀬軍之佐憲

中野寅吉全

柏田忠一本

菅原英伍全

星廉平本

齊藤仁太郎憲

栗山博全

中野寅吉全

柏田忠一本

菅原英伍全

星廉平本

齊藤仁太郎憲

